

# 生態学的意味論

## —アフォーダンスの認知意味論の捉え返し (1) :

## 生態学的意味論の定義、構成、根本概念—

岡崎 敏雄

### 要 旨

本論は以下を考察することを目的とする一連の論考の第1の論考である。第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうち人間言語に関する意味論について、具体的な言語生態資料の分析と記述に基づき、生態学的意味生成の構造と過程を示す。第3に、認知言語論のうちでも特に環境と言語主体にかかわる意味に注目しているアフォーダンスの認知意味論を取り上げ、そこで意味はどのように従前の意味論を超えた地平で新たに捉えられているかを見る。このうち、第1の論考である本論は、第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうちそれを構成する人間言語生態系をなす人間言語に関する意味論について、具体的な言語生態資料の分析と記述の前提となる生態場の概念について論究する。

### キーワード

生態学的意味論 認知言語論 アフォーダンスの認知意味論 自然言語 意味の生成

### 1 はじめに

本論は、生態学的意味論をめぐって、以下を考察することを目的とする第1の論考である。

即ち第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうち人間言語に関する意味論について、具体的な言語生態資料の分析と記述に基づき、生態学的意味生成の構造と過程を示す。第3に、認知言語論のうちでも特に環境と言語主体にかかわる意味に注目しているアフォーダンスの認知意味論を取り上げ、そこで意味はどのように従前の意味論を超えた地平で新たに捉えられているかを見る。その上で、生態学的意味論に基づき、生態学的意味論の根本概念の1つである生態場の視点からアフォーダンスの意味論を捉え返すとともに、それを踏まえて意味を「変容するもの」と捉える生態学的意味論における意味の変容の動因について考察する。

このうち、第1の論考である本論は、第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうちそれを構成する人間言語生態系をなす人間言語に関する意味論について、具体的な言語生態資料の分析と記述の前提となる生態場の概念について論究する。

## 2 生態学的意味論

### 2.1 生態学的意味論の定義

生態学的意味論とは、自然生態系を構成する人間的生態系を形作る人間主体が、生態場における自身並びに他の人間の生存の危機の認識を契機として、自他の、自然・人間両生態系上の生存追求に向けてなす**認識・実践**、及び両生態系における生存上の危機に対する**被投的投企の意志の形成・そのような実存としての自覚**を通じて、当初の契機である生存の危機を克服する過程で生成されてゆく意味の諸相を解明する学である。またその解明の先に開示されてゆく人間的自然が生きてゆくための意味、さらその解明の先に同様に開示されてくる人間的自然が生きることの意味をも包摂した自然生態系における意味およびその生成過程と構造を明らかにする学である。

それは、直接的には、直面する人間生態系上の人間生存の危機を契機とし、根源的に存在する自然生態系上の危機、即ち生命存在一般がもつ本質的な本性としての「生存の危機」性と、それらの危機を一方の契機とし、それと拮抗して形成されてくる秩序構造の創発を他方の契機として生成されてゆく自然生態系総体の諸相を対象化し、その媒介的過程として開示されてくる意味の生成過程と構造を明らかにする学である。

生態学的意味論は、以下のような生態学の見方に基づくものである。

即ち、生態学は、自然生態学、(言語生態学を含む)人間生態学の違いを問わず、何れも生命、非生命間の相互交渉的關係の形作る自然生態系・人間的生態系の下にある生存のありようとその基盤を問う学である。即ち、生物、人間の生存の諸相、その基盤を支える構造、過程を問う学である。即ち、「生存」に関わる問題を包摂する問いである「(自然生態系・人間的生態系界を包摂する)世界はいかなる相をなしているか」の問い、及び「その下で人間を含む生命体はどのように生きてあるか」の問いを、現実生態場の下にある人間的生態主体が追究していく学である。

このうち、言語生態学は、「生存」に関わる問題を包摂する問いである「(自然界を含む)世界はいかなる相をなしているか」の問い、及び「その下で人間を含む生命体はどのように生きてあるか」の問いによって求められるものを意味として位置づけ、これが自然生態系・人間生態系・言語生態系総体を形作る言語を媒介として表現され、把握されるものとして捉える。その場合、言語生態学は、前提として、言語を人間生態系のみのもので限定せず、自然生態系・人間生態系・言語生態系総体を形作るものとして捉える。

このうち、**自然生態系を形作る言語**とは、分子言語・DNAゲノム情報・細胞シグナル伝達・植物、動物の相互間シグナル・素粒子のゲージ場における相互作用・宇宙、高エ

エネルギー情報・等自然生態系と共進化する言語である。自然生態系・人間生態系・言語生態系総体を形作る言語を捉えるとは言い換えれば、3生態系総体の把握のもとに、言語を、3生態系に内在してその総体を形作るものとして捉えることである。このような自然生態系・人間生態系との間の内在的關係のもとにある言語を捉える学としての言語生態学は、一方で、自然生態系(その領域としての人間生態系を含む)と、他方、それぞれを内在的に形作る言語生態系の双方を視野のもとに捉え、その上で、双方の相互内在的關係とその下に開かれる後者の内在的過程・構造を記述・分析し、またその記述・分析に基づき保全・育成する学である。

言語生態学は、人間言語即ち人間的固有の自然的自然言語生態系の場合、次のような人間的自然の生存の危機の構造化の結果、直接的には人間的自然の生きることに関わる意味の崩壊に直面する21世紀の下で問われる生存に関わる問題を包摂する問いを追究することによって獲得されるものを意味として位置づけ、人間的自然言語生態学の領域における意味論の対象とする。

1989年ベルリンの壁崩壊、1991年ソ連解体以降の社会主義圏の崩壊を構造的契機として国家の壁の瓦解は「東西」それぞれの相貌の下に進み、全世界は一気に、諸規制の緩和による資本・金融・貿易の自由化、その帰結としてのグローバル化世界へと変貌した。それは自然・人間・言語三者ベースの生存基盤構造を揺るがし、代わりに**生存の危機の構造化**をもたらした。即ち、以下のような資本・金融・貿易の自由化による自給食糧の生産人口の減少と、それに伴う人間・自然両生態系それぞれを基礎とする生存構造の縮退である。その凝縮された形が、世界の飢餓人口の加速である。1990年代、世界の飢餓人口が8億から8億3千万に増加した。10年間で3千万の増加のペースである。これに対して、21世紀、2007年のサブプライムローン危機から2008年リーマンショック後の1年間に8.5億から10億に増加した。1年間に1.5億の増加のペースに加速した。6-7人に1人である。これは予測にとどまっていた「2050年総人口90億見込みのうち30億、つまり3人に1人の飢餓」が現実化しつつあるとあって過言ではない。

これは旱魃など自然災害によるたまたま起こった飢餓ではない。構造的飢餓である。生存の危機の構造の顕在化した帰結としての飢餓人口の増大である。

そのような状況の克服に向ってどのような方向性をもって生きるべきかに関わる「生きるためのスキーマ」(岡崎 2009b)が崩壊している。またその下で「生きる意味」も不透明化し、過去から今に至る現実が送り込んでくる状況を受け止め、それを捉え返し、そして未来に向って投げ返すこと、即ち、「被投的投企」に向けた実存あるいは意志が不在である。その下で意味の不在あるいは崩壊が進行している。そこでは、10億の飢餓の当事者と、当事者でない67億のうちの10億以外の人の直面する状況が、自分もその一人である人間生態系の危機として捉えられていない。その結果、人間生態系の危機という事態の把握、及びそれを形作るべき生存、生命を始めとする諸概念の形成の不在として意味の崩壊が進んでいる。今世紀に先立つ20世紀は、「世界の存在の意味を問う世紀」

と呼ばれた(木田 1996)。上記の世界の状況は、今世紀が「意味の崩壊の 21 世紀」であることを物語っている。それも、今世紀が人間、人間生態系にとって最も根源的なものとしての「生きることに関わる意味の崩壊の 21 世紀」たることを示している。

このように、21世紀は生存の危機の構造化が進行している世紀である。21世紀の学は、この生存危機の構造化を対象とし、その克服を課題とするものでなければならない。即ち、その克服を学的課題として持つもののみが学的妥当性を有する。具体的には、第1に、生存危機の構造化の克服課題を追求する学は、生存のあり方を分析・記述し、なおかつそのあり方の不全部を保全・育成することを追求するものでなければならない。即ち、上に取り上げられた雇用・食糧・社会保障の危機の構造化に対する自然・人間両生態系上の生存追求の学が求められている。同時に、雇用・食糧・社会保障の危機の構造化の認識・実践・及びその克服に対する被投的投企の意志の形成・そのような実存としての自覚に基づく意味の生成による克服過程を創出する意味の学、生きるための意味の生成過程を明らかにする学としての言語の学が求められる。このような学としての言語生態学の中核部分をなすものが生態学的意味論、より厳密にはその人間的生態系固有の意味を対象とする生態学的意味論である。そして直接的には、このような直面する人間生態系上の人間生存の危機を契機とし、さらにはその先に、根源的に存在する自然生態系上の危機、即ち生命存在一般がもつ本質的な本性としての「生存の危機」性を対象化し、その過程で開示されてくる自然生態系全体を領域とする意味の生成過程と構造を明らかにするのが**総体としての生態学的意味論**である。

## 2.2 生態学的意味論の構成

### 2.2.1 生態学的意味論の構成の前提その1：普遍的・本質的な存在としての言語

生態学的意味論の構成は以下の3つの存在を前提とする。第1に、自然生態系、人間生態系両者に共通して、普遍的・本質的なものとして言語が存在する。すなわち自然生態系には自然言語が、自然生態系の一部をなす人間生態系には自然言語の一部をなすものとしての人間的な自然言語が、固有の形態を持って存在する。

### 2.2.2 生態学的意味論の構成の前提その2：普遍的・本質的な存在としての認識

第2に、言語と表裏一体をなし、自然生態系、人間生態系に共通して普遍的・本質的なものとして認識が存在する。すなわち自然認識、人間認識が固有の形態を持って存在する。自然生態系を構成する物質においては物質における認識が存在する。例えば、アミノ酸のL型の種類はD型の種類との間で、お互いを識別し、異なる型同士ではタンパク質を形成しないという分子認識が存在する。また、酵素は特定のタンパク質との組み合わせでしか反応しないという物質認識が存在する。生物レベルでは、アメーバは触手、偽足による触覚によって近くにある物体が、食用にあたるか否かを認識し、免疫細胞は細胞外からのウィルス等を非自己と認識してこれの排除にあたる認識を示す。多細胞生物にお

いても空間認識はもちろん、固有の生物時計を媒介とする時間認識を持ち、蝶は固有の蝶の道を辿って餌を探し、産卵する場所を特定する認識を持つ。

後に述べるように生態学的意味論においては、言語主体にとって対象となる事物が如何なるものであるか、「何として捉えられるか」を示すものが意味である。この「として捉えられる」をつかさどるものが認識である。したがって、自然生態系・人間生態系に共通する言語はもとより、認識もまた生態学的意味論の構成の前提となる。

### 2.1.3 生態学的意味論の構成の前提その3：生態学的意味の生態系

第3に、自然生態系、人間生態系両者にわたる言語および、認識が形成する意味について、次のような3系列の意味が形成する意味の生態系が存在する。すなわち1.自然言語固有の意味、2.自然・人間間の対話由来の意味、3. 人間言語固有の意味である。このうち「1. 自然言語固有の意味」は、直接的に人間が把握することはできず、自然科学、農林水産業上、非専門の実践・観察・実験・メタファー思考・アナロジーなどの認知・認識を媒介としてなされる「2.自然・人間間の対話を介して捉えられる意味」を媒介として把握される。

## 2.2 生態学的意味論の構成

上記を前提として、生態学的意味論は、1.自然言語固有の意味、2.自然・人間間の対話由来の意味、3.人間言語固有の意味それぞれに対応して構築される意味論によって構成される。

## 2.3 意味の生成—自然の自己認識・自己実現の過程としての意味生成の過程—

生態学的意味論の下では、意味は自然史各段階・各水準においてそれぞれ固有の形で生成される。すなわち、1.物質的自然段階・水準、2.生物的自然段階・水準、3.人間的天然段階・水準でそれぞれ固有に生成される。その上で生態学的意味論においては、意味生成の過程とは、自然の自己認識・自己実現の段階的過程として捉えられる。即ち自然全体が、対象的自然と物質的自然、対象的自然と生物的自然、対象的自然と人間的天然間の相互交渉的關係生成の過程を通じて、物質・生物・人間各段階・水準を合わせた全体としての自然の自己認識・自己実現の過程を辿り、各段階のその都度意味が固有の形で生成されるものとして捉えられる。

### 2.3.1 対象的自然と人間的天然それぞれの自己認識・自己実現

このうち人間的天然段階・水準における対象的自然の自己認識・自己実現は、対象的自然が自らの内に人間的天然を自己の一形態として内在化させ、それとの相互交渉的過程におけるその自他認識・自他実現を媒介としてなされる。その相互交渉的過程即ち生産・労働を主軸とする過程を通じて、人間的天然は自身の意識生態場(次節参照)において、対象的自然の諸相が何であるかを認識する。こうして得られるものが、人間的天然を媒介とし

て得られる対象的自然の自己認識である。その認識を契機として、人間的自然による対象的自然に対する働きかけである生産・労働を通じて媒介的に、現実生態場(次節参照)において実現されることによって、対象的自然の自己実現がなされる。

他方、人間的自然における自己認識・自己実現は、生産・労働を通じて、そこに出現する生産物を獲得することによって、一方で、対象的自然の実現とともに、他方で、自己の投入によって新たなる対象的自然内の生産物として昇華された形で、自然の自己実現がなされる。同時に、人間的自然は、その過程で、新たなる対象的自然内の生産物に、投入された自己の実現を得ることで、そのような生産および生産物の獲得をもたらす自己、また実際にももたらしたものであるものとしての自己の認識を獲得する。

### **2.3.2 自然の自己認識・自己実現としての意味生成の段階的契機と、自己と世界の意味の相補性**

人間的自然を契機とする現実生態場(次節参照)において、意味は段階的に生成される(岡崎2009c, d)。その各段階の契機をなす能動的認識・実践・意志形成／そのようなものとしての実存の主體的規定／自覚のそのつど、自・他すなわち人間的自然・対象的自然の新たな規定として、意味は生成される。即ち、それぞれの段階的契機において自己と世界の新たな関係が規定され、そのもとに新たな自己と、新たな世界の意味が開示される。その点で、意味は、意味生成の段階的契機それぞれにおいて形成される自己と世界の意味の相補性のもとに生成されるものとしてある。

### **2.3.3 言語生態場においてなされる意味生成**

対象的自然と人間的自然の、相互交渉的關係生成としてなされる意味生成の場合、意味は、人間の内的言語生態場(次節参照)において、人間的自然言語を媒介として生成される。また、人間的自然相互の間で交わされる言語を媒介とする場合は、外的言語生態場(次節参照)において生成される。

### **2.3.4 自然の自己認識・自己実現としての意味生成における実体上の段階・水準**

前述した意味生成における実体上の段階・水準を、以上に見る対象的自然と人間的自然の相互交渉的關係生成を媒介として捉え返すと、自然の自己認識・自己実現としての意味生成は、次のような自然史過程全体の意味生成過程の一環として生成されるものとして、また、対象的自然が自らの内に人間的自然を自己の一形態として内在化させ、それとの相互交渉的過程におけるその自他認識・自他実現を媒介として把握される：1.対象的自然と、物質的自然段階・水準間の相互交渉的關係生成、2.対象的自然と、生物的自然段階・水準間の相互交渉的關係生成、3.対象的自然と人間的自然段階・水準間の相互交渉的關係形成。

### **2.3.5 物質的自然・生物的自然段階・水準の意味生成**

物質的自然・生物的自然段階・水準における、自然の自己認識・自己実現としての意味生成は、自然言語を媒介としてなされるこれらの両段階・水準においては、それぞれの「意識」生態場におけるそれぞれの内的言語生態場・外的生態場において、物質・生物的自然言語を媒介としてなされる。ただし、人間的自然がこれらの意味にアクセスするのは、「対象的自然が自らの内に人間的な自然を自己の一形態として内在化させ、それとの相互交渉的過程におけるその自他認識・自他実現」の一環としての「自然との対話」、すなわち、自然科学、農林水産業の知見を媒介とする観察・実験・推論やメタファー的思考、アナロジーによって自然を把握することを通じてである。

### 3 生態学的意味論—人間言語の生態学的意味論—

以上に基つき本論では、生態学的意味論の中、まず人間的な自然言語生態系における意味を対象とする人間言語の生態学的意味論を中心に考察する。以下特に断らない限り、言語、意味のうち人間言語に関してのみ論究する。

#### 3.1 意味の生態学的生成

**ecological genesis** : 生態学的意味は、言語主体の生態場が実践生態場として生成される下で生成される。

##### 3.1.1 生態場

生態学は、個々の人間即ち自己及び人が生き、人間生活を形づくっている今、この場を**現実生態場**として把える。現実生態場とは、人間が自己もその一部を成し、その上で直面している**社会、及び自然**の形作る現実世界の現相である。一方、現実世界を構成する人間の意識内に形づくられるのが**意識生態場**である。「現実世界がどうなっているか」の問いをきっかけとして形づくられていく「現実世界の能動的認識」の過程が、この意識生態場の中に、**認識生態場**として形成されていく。

現実生態場にあつて、個々の人間の認識生態場で形成される内容を、相互にやりとりすることによって現実生態場での人間諸活動を円滑、かつ効率的に進めることを目指す言語活動によって形づくられるのが**言語生態場**である。

以上を大きく把えると、まずは個々の人間が生き、その下に置かれている2つの生態場、一方の現実世界に対応する**現実生態場**、他方の個人の意識内世界に対応する**意識生態場**の両者がある。現実生態場には**言語生態場**、意識生態場には**認識生態場**が形づくられる。

以上のマクロな構図を捉えた上で、言語生態場については、現実生態場の中に形づくられる**外的言語生態場**と意識生態場に作られた**認識生態場**の中にも**内的言語生態場**が形成される。

**外的言語生態場**は、現実生態場の下にある人と人との間の外的やりとり、即ち社会的

相互作用をなすやりとりが生み出す生態場である。これに対して、**内的言語生態場**は、典型的には自問自答のように人が認識内で行なうやり取りが生み出す生態場である。また意識生態場の中で形づくられる「世界(即ち社会及び自然、)の能動的認識」の「認識(即ち、社会及び自然に関する認識)」は、言語を媒介としてなされる。但し、ここでの「言語」は、上記の外的言語生態場で、人と人との間で現実の発話の形または文字の形でやり取りされる言語(これを**外的言語**と呼ぶ)とは異なる。外の現実の中ではなく、人の意識の中における「言語」である。その意味で**内的言語**と名つけられるものである。

このように**言語生態場**には、一方で現実生態場の中に形づくられる**外的言語生態場**と、他方の意識生態場の中に形づくられる**内的言語生態場**の2つがある。

以上の生態場の構成は次の3段階を辿って新たに**実践生態場**を持つ。即ち、**第1段階**として、認識生態場において**現実世界の能動的認識の過程**が形成される。その端緒の契機は、所与、自発、直接的・間接的あるいは意識的・無意識的など多様な**実践**である。**第2段階**として、その認識に基づいた上での現実世界に対する実践が形作られ、**認識内容を実現する現実相が獲得される**。さらに、**第3段階**として、第1、第2段階の循環的蓄積を辿る中で、その個人が直面して生きている「今、この現実生態場」を超えてそのような次の「今、ここ」即ち「**未来の生態場**」を、どのようにして形作るかの**具体像が形成される**段階に至るとき、その個人にとってその現実生態場は、同時に、**それ以前の現実生態場とは異なる性格**を新たに付与された生態場、**実践生態場**として存在し始めるものとして捉えられる。

この**実践生態場**の生成に至る各段階で注目すべき点は、その各段階で併行して、世界の能動的認識、他の個人との交換の形で形作られる自己内外の対話及びそれをなす**内的言語**、**外的言語**が、それらの現実相を獲得する実践、さらに最終段階の**実践生態場**の各形成過程で、それぞれ**言語のもつ意味の性格が新たなもの**に変わっていくという点である。

即ち、言語主体の生き方が、**実践生態場**の生成に至る各段階に対応して新たなものとして形作られるのに伴い、その**言語主体の言語のもつ意味のあり方も各段階に応じた変容を遂げていく**。言語主体の**新たな生き方**即ち**新たな人間生態**に応じた**新たな意味のあり方**、即ち**言語生態**が、生き方を形作る認識、実践、現実世界(=現実生態場)下の諸関係、を主体とする関係総体の中に織り込まれて、**新たな生態学的関係の中に形作られる意味の生成**として**段階的に変容を遂げていく**のである。これが生態学的意味の生成である。

この前提となるのは、**言語は人の生き方、即ち人間生態との関わりなしにその意味が成立しない**、という生態学における**言語の意味に関する見方**である。即ち、人の生き方と結び付けられることではじめて**言語の意味は生成される**、という見方である。

以上の生態場の大きな鳥瞰図は言語生態と人間生態が相互に緊密な関係を形づくっている**内的構造**を鮮明に示している。即ち、**現実生態場と意識生態場が合わせて形成する**

人間生態全体の中に、言語生態は、外的、内的言語生態場の中に形成されるものとして位置づけられ、全体として、生態場をなしているのである。この生態場に新たに実践生態場が生成されることで、生態場全体即ち人間生態全体とその中に位置づけられる言語生態は、新たなステージに移行する。それが即ち以下に述べる、生態学的意味の生成されていく下での人間生態、言語生態のステージである。このステージは同時に、また、言語の形骸化、融解の保全された人間生態、言語生態のステージである。

### 3.1.2 生態場が実践生態場として生成されるための過程

生態場が実践生態場として生成されるためのより詳細な過程は、次のようなものである。

現実生態場(=現実世界)に対する能動的認識の過程が意識生態場内の認識生態場において形成される。(意識生態場は、現実世界を構成する人間の意識内に形作られる。)その「能動的認識」の過程を通して、第1に、「世界はどうなっているか」、「そこでどのように生きていくか」が捉えられていく。第2に、その中で、それらの問いに答える前提として、「この世界で生きていくために確保されるべき生態学的条件とは何か」、「それはどのようにして確保されるか」が捉えられていく。第3に、その「確保」のために、「何がなされるべきか」「どのように」が捉えられていく。

次に、その「なされるべきこと」、「方法」の具体像を獲得するのに、第1に「自分、人が生きている今、この場」即ち、「今の生態場」に先立つ「過去の生態場」がどのようなものであり、それに対して「今の生態場」はどのようなものであるか、あるいは、どのようにしてそこから形作られてきたか、第2に、「今の生態場」に基づき、「どのように」して「未来の生態場」が形作られていくのか、の具体像が形をなしていく。

この具体像によって、「今の生態場」は、受け身的ではなく、より根源的に能動的に捉えられ、意志に基づく実践を媒介として「今の生態場」は、「未来の生態場」の具体像に変えられるべき能動的関わりの対象として捉えられる。

これらの具体像や能動的関わりは、**3つの実践を契機として獲得される**。第1に、自然との相互作用である「自分、人の生存のためにもものを生み出す実践」、第2に、それを媒介する自分と人との間の社会的相互作用である「ものを生み出す実践を進めるための自分と人の協働的実践」、第3に、両実践を媒介する(自然及び社会に関する認識を形づくる内的言語の形態と、社会的相互作用の契機を成す外的言語の形態両者の)言語的実践の3つの契機である。このようにして生態場は実践生態場として生成される。

以上の諸過程は特定の生起順ではなく、言語主体の置かれた生態場の個別性に応じた端緒から生起し、相互交渉的過程の中で生態学的過程が形作られていく。

以上の全体を通じて、第1に、認識・実践を契機とする、「言語生態系と人間生態系、つまり言語と社会の生態学的生成」が形作られる。第2に、「言語生態系、人間生態系、自然生態系、つまり言語、社会、自然3者の生態学的生成」が形作られる。自然につい

て見れば、自然は、それ自身で生成、発展するのと並行して、人間(という自然の一部をなすもの)が、自然というものがいかなるものであるのかを把える認識とそれを形成する言語、また、その認識に基づき、他の人間との言語によるやりとりを媒介とする協働的実践、典型的には(食糧とされる)植物という形の自然として生成されるのである。

### 3.1.3 「生態場が実践生態場として生成されるための過程」のなかで生態学的意味が生成される構造

認識生態場における現実世界の能動的認識過程を通じて、言語の生態の内的生態環境である(「世界」、「生き方」に関する)概念のネットワークが新たなものとして創り出される。その場合、「個々の概念(内的言語)が言語主体の生きることと結びつけて把えられることを通じて意味が成立する。これが生態学的意味の生成の第一段階である。

次に、「概念のネットワーク」を形づくる各概念が一方で自己内対話などを通して内的言語として機能し、他方で、外的言語として表現され、また、対話相手の外的言語化された概念が理解される中で、つきあわせられ、さらに実践を通じて、認識内容を実現する現実相が獲得され、それによって文字どおり自己の実践という形での自己の生き方とのつながりが形成されていく。これが認識・言語に基づく実践という現実相獲得にいたる過程における生態学的意味の生成である。これが生態学的意味の生成の第二段階である。

第1、第二段階を通じて、概念のネットワークは、「世界(=人間生態系、より正確には、自然生態系と、その一部をなしているものとしての人間生態系)はどうなっているか」「そこでどのように生きていくか」「この世界で生きていくために確保されるべき生態学的条件は何か」「それはどのようにして確保されるか」、その確保のために「何がなされるべきか」「どのように」、また「自分、人が生き直面している今、この生態場」に先立つ「過去の生態場」がどのようなものであり、それに対して「今、この生態場」はどのようなものであるか、あるいは、どのようにしてそこから形作られてきたか、さらにどのようにして「未来の生態場」が形作られていくか、の一連の「生態学的問い」に<問い-答える>を通じて、「今の生態場」が「未来の生態場」の具体像に変えられるべき能動的対象として把えられることにより、自己の生きることの諸相に結びつけられる。このような過程が生態学的意味生成の第三段階である。

以上を通じて、概念のネットワークは「生きるための概念のネットワーク(=生きるためのスキーマ)」として、またそれに基づいて、言語の意味が「生きるための意味」即ち生態学的意味として生成される。

### 3.1.4 人間主体による客体に対する認識・実践の変容に基づく意味の変容—自己・世界両者の意味の相補的変容—

人間主体がその客体にあたる自然・社会的環境に対して、いかなる捉え方、関わり方

を取るかによって、意味は変容する。一方で、客体的環境が、人間主体の力、能動的関わりによって変更不可能だととらえている場合の意味は、他方で、客体的環境が人間の能動的関わりで変更可能だととらえている場合の意味と異なる。したがって、変更不可能だととらえている場合の客体的環境すなわち世界あるいはそれを構成するもの、この意味と、あるいはそれを表す言語の意味は、変更可能だと捉え方が変わった場合には、変容する。また、逆も変容する。さらに捉え方即ち認識のみならず、関わり方即ち実践もそれに応じて変わる場合には、さらにもう一段階の変容を辿る。すなわち、一般的には人間主体による客体に対する認識が変容することによって、意味あるいはそれを表す言語の意味は、第一段階の変容を辿る。さらにその認識に基づく実践が変容することによって、それらは、第二段階の変容を辿る。

それらのいずれの場合も、一方で自然・社会的環境すなわち世界あるいはそれを構成するもの、ことについての言語の意味と、あるいはそれを表す言語の意味と同時に、他方で、自然・社会的環境すなわち世界、それを構成するもの、ことに対して、捉え返し、能動的関わりを持つ人間主体の捉え方に基づく意味、すなわち自己とは何かの規定もまた変容する。即ち自己・世界両者の意味の相補的変容がそこには見られる。言い換えれば、生態場における意味の生成の段階のうち、自己の捉え方に関わる第3段階の意味の生成、上に述べるところの意志の形成・そのようなものとしての実存の自覚の生成は、このような相補的変容の特性に基づく生成である。さらに言い換えれば、人間主体がその客体にあたる環境に対して、能動的関わりによって変更可能だと捉え返し、実際にもその関わりを実現することによって、現実生態場が実践生態場として新たに生成されるとき、それに基づく世界と自己の意味あるいはそれらを表す言語の意味は、第3段階の意味の生成として新たに生成されるものとしてある。

#### 4 結語

本論は、生態学的意味論をめぐって、以下を考察することを目的とする第1の論考を示した。

即ち第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうち人間言語における意味論について、具体的な言語生態資料の分析と記述に基づき、その構造と過程を示す。第3に、認知言語論のうちでも特に環境と言語主体にかかわる意味に注目しているアフォーダンスの認知意味論を取り上げ、そこで意味はどのように従前の意味論を超えた地平で新たに捉えられているかを見る。そのうえで、生態学的意味論に基づき、生態場の視点からアフォーダンスの意味論を捉え返すとともに、それを踏まえて意味を「変容するもの」と捉える生態学的意味論における意味の変容の動因について考察する。

このうち、第1の論考である本論は、第1に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成について提示し、第2に、自然言語生態系のうち人間言語における意味

論について、具体的な言語生態資料の分析と記述の前提となる生態場の概念について論究した。

#### 参考文献

- Haugen, E. (1972) *The ecology of language*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Haugen, E. (1974) The ecology of language. In Anwar Dil (Ed.), *The ecology of languages: Essays by Einar Haugen*. Stanford: Stanford University Press: 325-339.
- Haugen, E. (1985) The language of imperialism: Unity or pluralism. In N. Wolfson, & J. Manes. *Language of inequality*. Amsterdam: Mouton: 3-17.
- Hornberger, N. H. (2002) Multilingual language policies and the continua of biliteracy: An ecological approach. *Language Policy* 1: 27-51.
- Hornberger, N. H. & Skilton-Sylvester, E. (2000) Revisiting the continua of biliteracy: International and critical perspectives. *Language and Education: An International Journal* 14 (2): 96-122.
- Kaplan, R. & Baldauf, R. (1997) *Language planning from practice to theory*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Kaplan, R. & Baldauf, R. (1998) The language planning situation in ... *Journal of Multilingual and Multicultural Development*. vol. 19, No. 586.
- Lidicoat, A.J. and Baldauf, R. (2008) *Language Planning and Policy*. Clevedon UK: Multilingual Matters Ltd.
- Maynard, Smith, J., Szathmary, E. (1999) *The Origins of Life; From the Birth of Life to the Origin of Language*. Oxford University Press.
- Mühlhäusler, P. (1992) Preserving languages or language ecologies: A top-down approach to language survival. *Oceanic Linguistics* 31 (2): 163-180.
- Mühlhäusler, P. (1996) *Linguistic ecology: Language change and linguistic imperialism in the Pacific region*. London: Routledge.
- Mühlhäusler, P. (2000) Language planning and language ecology. *Current Issues in Language Planning* 1(3): 306-367.
- Nettle, D. (1999) *Linguistic diversity*. Oxford: Oxford University Press.
- Ricento, T. (2000) Historical and theoretical perspectives in language policy and planning. *Journal of Sociolinguistics* 4(2): 196-213.
- Ricento, T. (2006) *An Introduction to Language Policy*. Oxford : Blackwell Publishing.
- 岡崎敏雄 (2005a) 「言語生態学原論—言語生態学の理論的体系化—」『共生時代を生きる日本語教育』: 503-554, 凡人社.
- 岡崎敏雄 (2005b) 「言語生態学に基づく言語政策研究—言語の生体・機能・福祉と言語政策—」『筑波応用言語研究』12: 1-4.
- 岡崎敏雄 (2006a) 「言語生態学における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係—『巨視

- のモデル』の生態学的位置づけ— 『筑波大学地域研究』 26: 15-26.
- 岡崎敏雄 (2006b) 「言語における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係—『巨視的モデル』の生態学的評価—」 『筑波大学地域研究』 27: 15-27.
- 岡崎敏雄 (2006c) 「外国人年少者日本語教育の基礎としての言語政策研究—スウェーデン言語政策の言語生態学の動態分析」 城生佰太郎博士還暦記念論文集委員会編『実験音声学と一般言語学』: 538-547, 東京堂出版.
- 岡崎敏雄 (2006d) 「言語生態学の基底次元をなす学としての言語福祉学の展開—言語・言語話者の福祉の政策の要としての言語政策の分析—」 『筑波応用言語学研究』 13: 1-12.
- 岡崎敏雄 (2007a) 「持続可能性を追求する日本語教育—その基礎としての言語教育における生態学的アプローチ」 『筑波大学地域研究』 28: 67-76.
- 岡崎敏雄 (2007b) 「地域社会の国際化に果たす大学の役割—グローバルな視点とローカルな視点—」 『留学生センターシンポジウム2006 地域社会の国際化に果たす大学の役割 報告書』 5: 7-16, 茨城大学・宇都宮大学留学生センター.
- 岡崎敏雄 (2007c) 「情報生態学原論」 『筑波応用言語学研究』 14: 1-14.
- 岡崎敏雄 (2007d) 『外国人年少者の心理・社会的要因が日本語学習言語の習得に及ぼす影響の研究』 平成16-18年度科学研究費補助金研究基礎研究 (C) 課題番号16520312.
- 岡崎敏雄 (2008a) 「持続可能性教育とその要としての言語教育のためのカリキュラム論—アクロス・カリキュラムのデザイン—」 『文藝言語研究 言語篇』 53: 17-32, 筑波大学.
- 岡崎敏雄 (2008b) 「言語習得・認知科学研究成果の生態学的展開に基づく日本語教育方法論」 『筑波大学地域研究』 29: 129-141.
- 岡崎敏雄 (2008c) 「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題—持続可能性言語教育原論—」 『筑波応用言語学研究』 15: 1-14.
- 岡崎敏雄 (2008d) 「言語教育の生態学的アプローチ言語生態学に基づく言語生態系の育成: 中国語母語話者の場合—」 :363-371 『日本語研究』 精華大学出版社.
- 岡崎敏雄 (2009a) 『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語』: 1-264, 凡人社.
- 岡崎敏雄 (2009b) 「持続可能性教育としての日本語教育—課題の克服とその具体的形態—」 『筑波大学地域研究』 31: 1-16.
- 岡崎敏雄 (2009c) 「持続可能性教育としての日本語教育のデザイン—生態学的リテラシーの育成—」 『文藝言語研究 言語篇』 54: 1-16, 筑波大学.
- 岡崎敏雄 (2009d) 「生態場における生態学的意味の生成—第一、第二段階の生成—」 『筑波応用言語学研究』 16: 1-14.
- 岡崎敏雄 (2009e) 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン—類個の育成—」 『文藝言語研究 言語篇』 56: 73-92, 筑波大学.
- 岡崎敏雄 (2009f) 「人間生態学としての言語生態学に基づく持続可能性言語教育の理論と実践」 『持続可能性の内容重視日本語教育における意識分析に基づく学習のデザインの基礎

- の研究』： 1-235, 平成19-21年度科学研究費補助金研究 課題番号19652045 研究代表者岡崎敏雄.
- 岡崎敏雄 (2010a) 「言語生態学に基づく持続可能性日本語教育方法論—生存を主題とする学習のデザイン—」 『文藝言語研究 言語篇』 57: 75-121, 筑波大学.
- 岡崎敏雄 (2010b) 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン—教室活動・シラバスデザイン・教師の役割—」 『筑波大学地域研究』 31: 1-24.
- 岡崎敏雄 (2010c) 『持続可能性の内容重視日本語教育における意識分析に基づく学習のデザインの基礎の研究』： 1-157, 平成19-21年度科学研究費補助金研究 課題番号19652045 研究代表者岡崎敏雄.
- 岡崎敏雄 (2010d) 「生態学的意味の生成—第三段階の生成—」 『日本語と日本文学』 50. (印刷中)
- 岡崎敏雄 (2010e) 「持続可能性教育としての日本語教育」 『日本語教育入門』： 3-17, くろしお出版.
- 岡崎敏雄 (2010f) 「言語生態学の相互一体的学としての人間生態学の構築—人間生態系前史としての自然生態系史の生態学的記述—」 『筑波応用言語学研究』 17: 1-16.
- 岡崎敏雄 (2011a) 「持続可能性日本語教育の学習のデザイン—雇用—食糧軸のライフラインリスク像育成のための学習のテキストシラバスデザイン—」 『筑波大学地域研究』 32: 137-156, 筑波大学.
- 岡崎敏雄 (2011b) 「言語生態学研究方法論」 『外国語学研究』： 101-110.
- 岡崎敏雄 (2011c) 「言語生態学に基づく海外年少者日本語教育原論」 『語学教育フォーラム』 第21号： 5-22.
- 岡崎敏雄 (2011d) 「言語生態学に基づく中国語母語話者年少者に対する日本語教育方法論」 『水門』 23. (印刷中)
- 岡崎敏雄 (2011e) 「言語生態学に基づく日本語教育学原論—意味の生態系育成としての言語教育—」 『言語学論叢』 オンライン版 3 (通巻 29)： 1-17.
- 岡崎敏雄 (2011f) 「言語習得・保持研究の再構築と非母語話者年少者日本語教育」 『日本語と日本文学』 52: 13-26.
- 小田珠生 (2010) 『言語少数派の子どもに対する父母と協働の持続型ケアモデルに基づく支援授業の可能性—言語生態学の視点から—』 博士論文, お茶の水女子大学.
- 佐藤真紀 (2010) 『学校環境における言語少数派の子どもの言語生態保全—「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」の可能性—』 博士論文, お茶の水女子大学.
- 房賢嬉 (2011) 『持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリング活動の可能性—対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—』 博士論文, お茶の水女子大学.
- 平野美恵子 (2011) 『共生日本語教育実習における実習生間の言語共生化過程の研究』 博士論文, お茶の水女子大学.
- 穆紅 (2010) 『言語少数派の子どもの継続的認知発達の保障—生態学的支援システムの構築に

向けてー』博士論文, お茶の水女子大学.

楊峻 (2010)『中国の大学の日本語専攻主幹科目へのグループワークの提案ー言語生態の保全  
の観点からー』博士論文, お茶の水女子大学.

(岡崎敏雄 筑波大学名誉教授)

# Ecological Semantics

Reconstruing of affordance cognitive semantics (1):  
the definition and the structure of ecological semantics,  
the concept of generation of meaning

Toshio OKAZAKI

This thesis, together with the following series of papers, is designed to consider the following:  
1. the definition and the structure of ecological semantics as well as the concept of generation of meaning; 2.semantics of human language, focusing on the structure and the process of generation of ecological meaning, and 3.affordance cognitive semantics which pays attention to meaning that is considered to be generated through interaction between language subject and its environment. In particular, this thesis focuses on the discussions of the 1 and 2 of the above.